

Ⅰ はじめに

図画工作科における表現活動では、児童が「何を（表現内容）」「何で（表現材料）」「どのように（表現方法）」表すかという三つの要素をしっかりとつかむことで、主体的な学びの実現が図られる。そんな中、上学年では、表現の幅が広がる一方で、「自分の表したいことが思いつかない」「活動が続かない」といった児童の姿も見られる。材料や用具を前にしても、表現したいもののイメージが湧かず、戸惑いながら時間が過ぎていく。そんな姿に向き合う中で、「児童が表したいことを見付けたり、表し方について考えたりするためには、どうすればよいのか」という問いが生まれた。

その手掛かりとなったのが、造形遊びの中で見えた児童の姿だった。材料や用具とかわる中で、「なんか気持ちいい」「もっとやってみたい」といった感覚が生まれ、活動に没頭し、さらに「こんな形にしたい」「こうすると面白くなりそう」と、自分なりの表現へと自然につながっていた。こうした手や体を通して感じる感触の面白さと心が満たされる実感、そしてこの両方から得られる“手応え”が活動において必要ではないかと考えた。

そこで本研究では、児童に「手応え」を意識させることで、それが表したいことを見付けることや自分らしい表し方を追究することにつながるかどうかを検証していく。

Ⅱ 指導の実際

（Ⅰ）題材 ふにゃっとできタワー

〈 A 表現（Ⅰ）イ（Ⅱ）イ B 鑑賞（Ⅰ）イ 共通事項（Ⅰ）ア（Ⅱ）イ 〉

- ① 目標 ア ウレタンスポンジをはさみで切ったり、爪楊枝や竹串を刺したりする際の手応えや感触、形の感じが分かるとともに、用具を適切に扱いながら、材料を生かした表現を工夫して表す。（知識及び技能）

イ 手応えや感触、形の感じを基に、自分のイメージをもち、素材の特徴や形を生かしながら、どのように表すかについて考えるとともに、自分や友達の作品の造形的なよさや面白さについて感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げる。

（思考力、判断力、表現力等）

ウ 進んで表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、素材の特徴や形に関わり、楽しく豊かな生活を創造しようとする。（学びに向かう力、人間性等）

② 実践内容及び指導計画（全５時間）

ウレタンスポンジを切ったり刺したりする際の「ザクッ」、「プスッ」といった手に伝わる手応えを通して、つないだり、組み合わせたりして、自分だけの面白い「タワーづくり」を楽しむ造形活動を行った。

第Ⅰ次 ウレタンスポンジをはさみで切ったり、爪楊枝や竹串で刺したりして、自立できる方

法を試し、タワーづくりの計画をする。……………2時間

第2次 自分なりのおもしろタワーをつくり、友達同士で鑑賞をする。……………3時間

3 結果と考察

(1) 自分の表したいことを見付け、動き出す児童の姿

活動開始直後から、面白いと思う立たせ方に挑戦したり、次々につなぎ合わせたりするなど、夢中になってタワーづくりに取り組む姿があった。例えば、児童 A はタワーがなかなか立たず、苦戦しながらも、倒れる方向を見て、それを支えればよいことに気付いていた。次時では、その経験を生かし、土台を安定した新しいタワーをつくりだしていた。また、児童 B は活動のたびに分解・組み立てを大胆に繰り返しながら、自分のつくりたいもののイメージを豊かに広げ、よりダイナミックなものへと発展していた。児童 C は、過去の題材では活動が長続きせず、支援が必要だったが、本実践では「まだまだやりたい」と最後につぶやくほど、自ら進んで粘り強く取り組む姿が見られた。

これらの姿から、児童は材料や用具とのかかわりの中で「手応え」を感じながら、自分の中にある思いやイメージに気づき、自分なりの表現へとつなげていたことが分かる。

(2) 「手応え」と「表したいこと」の関係

児童はウレタンスポンジを思い思いに切ったり刺したりして活動を進めていた。それはスポンジという柔軟性・弾力性があり、加工が容易な素材とのかかわりが児童の心と体を満たすことで、「手応え」が得られていたからだと思われる。そしてその結果、「何で（材料）どのように（表現方法）」表すかが思い浮かべやすくなり、そこから「何を（表現内容）」表したいかを探し始める姿につながっていた。

つまり「何を」表すかというテーマだけでは、児童の心は十分に動かない場合があり、魅力的に感じる材料や用具とのかかわりがあってこそ、自分の思いやイメージに気づき、よりよい表現へと向かっていくのではないかと感じた。この三つの要素は、児童の心と体を通してつながっていくものであり、「手応え」はそのつなぎ手として重要な役割を果たしていた。

4 おわりに

ある児童が、自分の背丈ぐらいになったタワーを「全部そのまま持って帰りたい」と言いながら、どうやって抱えて持ち帰ろうかと真剣に考えていた。その姿から、充実した製作過程を歩んだからこそ、作品に自分の思いや発見が詰まり、かけがえのないものになったのだと強く感じた。またこれまでは、「こう指導すべきだ」「こんな作品になってほしい」といった教師側の強い思いにとらわれるあまり、児童が表したいことを見付ける可能性を狭めていたことにも気付かされた。

今後も、「手応え」を大切にしたい題材づくりに取り組みながら、児童にとっていつまでも忘れられないような楽しさが残る“心と体に深く刻まれる図工の時間”となるよう研究を続けていきたい。